

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17520

研究課題名(和文) 老年期うつ病者のナラティブから創出する治療的ケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a therapeutic care programme created from the narratives of older adults with depression.

研究代表者

田中 浩二(Tanaka, Koji)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：40507373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1)老年期うつ病者の抑うつや希死念慮につながるビリーフを明らかにし、2)それを緩和するための治療的ケアプログラムを検討した。基盤知識として、老年期うつ病者のビリーフを明らかにするために質的研究を行った。質的研究の結果と先行研究の知見、精神療法やリカバリーの理論などを参考にして、老年期うつ病者の治療的ケアプログラムを検討した。研究者と臨床のエキスパートの間で、ケアプログラムの要素と臨床適応性について合意が得られるまで検討した。COVID-19による制約下で、考案したケアプログラムを評価するための実践研究が実施できなかったため、さらなる研究が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、当事者の体験を基盤として、老年期の心理社会的特性、精神療法の理論、リカバリーの理論などとの対話の中で、老年期うつ病者へのケアについて検討した。今後、世界的に高齢化のさらなる進展が見込まれる中で、老年期のwell-beingを支援するために必要な社会のあり方やメンタルヘルスの苦悩を抱えた当事者に対するケアの視点を示唆することができた。当事者の体験と哲学的背景や理論的背景との対話によって、社会学や心理学などの基礎学との融合による学術的な視点から、メンタルヘルスケアのあり方を検討したことで、高齢者のケアに広く応用可能な知見を抽出することができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, 1) the beliefs that lead to depression and suicidal ideation in older adults with depression were identified and 2) a therapeutic care programme to alleviate these beliefs was examined. As foundational knowledge, a qualitative study was conducted to identify the beliefs of older adults with depression. The results of the qualitative study and the findings of previous research, as well as theories of psychotherapy and recovery, were used to examine a therapeutic care programme for older adults with depression. The elements of the care programme and its clinical adaptability were discussed between the researcher and clinical experts until agreement was reached; further research is needed, as a practice study using the devised care programme could not be carried out due to the constraints imposed by COVID-19.

研究分野：高齢看護学

キーワード：老年期 うつ病

## 1. 研究開始当初の背景

老年期は、他の年代と比較し状況要因によって抑うつ的な心理状態になりやすい。気分障害患者に占める高齢者の割合は、全体の35% (2014年患者調査) と高率である。また、自殺者に占める高齢者の割合も全体の約40% (2014年警視庁) となっている。従って、高齢者のうつ病や自殺への対策は超高齢社会のわが国にとって喫緊の課題である。

高齢者のうつ病や自殺の背景には、健康問題や認知機能の問題、心理社会的孤立など様々な喪失体験がある。このように高齢者のうつ病では、若年者と異なり老年期という発達段階の影響を強く受けるため、老化による一般的な反応と捉えられたり、非定型的な症状を呈したりすることが多い。それゆえ、高齢者ではうつ病や希死念慮が見逃されやすく、老年期に特化したうつ病研究が重要である (高橋, 2009)。

そこで申請者は、老年期うつ病者の体験 (田中ら, 2012) や生活世界との関連における回復のあり様 (田中ら, 2014) を明らかにし、彼らの体験に添ったケアの手がかりを提示した。しかし、回復に向かう萌芽的な力の一方で、当事者の語りからは抑うつの苦悩を助長しているビリーフが存在することも見出された。

ビリーフは、Wright, L.M. (2009) によって提唱された概念であり、問題や苦悩をつくり続ける「苦しめるビリーフ」とそれらを緩和する「楽にするビリーフ」がある。うつ病者には、病気の悪化を導くメタ認知的な信念、すなわち「苦しめるビリーフ」があることが報告されている (長谷川ら, 2014)。またうつ病者の性格傾向として、完璧主義や責任感の強さ、他者に対する自己犠牲的配慮などの特性があり (笠原, 1976)、これらに基づいて形成されたビリーフへのとらわれは抑うつや希死念慮を増悪させる要因となる。特に老年期うつ病者のビリーフは、長年の人生経験や生活習慣からの影響を受けるため、若年者よりも深く多彩であることが考えられる。そのため、人生や病いのナラティブを十分に聴く中で老年期うつ病者に特化したビリーフを明らかにし、「苦しめるビリーフ」による苦悩を緩和していくことが重要である。これらのことから、老年期うつ病者を支援するためには、回復する力を活かすことのみならず、抑うつや希死念慮につながるビリーフを緩和するという視点にも着目し、高齢者の特性に応じた新しい治療的ケアプログラムを考案していく必要がある。

老年期うつ病者に対して、治療的関係のみならず年長者に対する敬意をもって、人生の意味に着目した精神療法を行うことの重要性や治療的効果が報告されている (高橋, 2009)。すなわち、当事者と援助者の間で構築するナラティブによって、当事者の回復力やビリーフは拓かれ、そこから回復に寄与する治療的ケアのあり方が明確化することができると考えた。

そこで本研究では、老年期うつ病者のナラティブから創出する治療的ケアプログラムを開発するために、今回は老年期うつ病者の抑うつや希死念慮につながるビリーフに焦点を当てる。

## 2. 研究の目的

老年期うつ病者の抑うつや希死念慮につながるビリーフを明らかにし、それを緩和するための治療的ケア指針を明確化する。また、平成28年度までに作成したレジリエンスを活性化するための治療的ケア指針と今回作成する抑うつや希死念慮につながるビリーフを緩和するための治療的ケア指針を統合し、老年期うつ病者への治療的ケアプログラムを開発する。最終的には、治療的ケアプログラムを老年期うつ病者に適応し、抑うつや希死念慮の改善状況で評価する。

## 3. 研究の方法

### 1) 老年期うつ病者の抑うつにつながるビリーフを明らかにする

研究デザイン: Riessman (2008) のナラティブ研究法

研究参加者: 老年期うつ病者で、総合病院精神科で治療によって急性期症状が軽減し、コミュニケーションが可能な人

データ収集方法: 参加観察ならびにナラティブインタビューによってデータを収集した。ナラティブインタビューでは、病気になられてからの経過やご苦労されたこと、病気の原因と考えられること、ライフヒストリー、これまでの人生で気がかりなこと、家族や周りの人々への思い、現在の療養生活の送り方、生き方や価値信条などを自由に語ってもらった。研究者は、支持的に傾聴しながら内容を確認したり、適宜状況に根ざした質問を挿入したりしながらインタビューの内容を深めた。複数回のインタビューが行われた場合は、前回のインタビュー内容を確認しながら進めた。

データ分析方法: Riessman (2008) のナラティブ研究法に基づき、先行理論に依拠しながら個人的ストーリーに目を向け、ひとつのシーケンスを損なわずに分析する手法を基盤として、テーマ分析を行った。逐語録を精読し、個々の事例の全体的な意味を理解した。研究参加者の語り全体の文脈を損なわないように注意しながら、データを意味単位ごとに区切った。1事例ごとに語られた具体的な意味単位同士の関係や全体と各意味単位との関係を理解した。抑うつ

につながるビリーフが語られている事象に着目し、参加者のナラティブが語られた背景と各事象に含まれる意味について解釈した。各事象を意味内容の類似性に基づいて統合し、サブテーマを抽出した。2事例目以降は、新たなサブテーマが抽出されなかった場合は、それまでの事例のサブテーマに統合した。全事例のサブテーマの類似性に基づいて、そこに包含される意味をテーマとして特定した。このようなプロセスで、個人にとっての意味の多様性を保ちつつ、事例間の共通性を見出した。サブテーマ・テーマの抽出にあたっては、データと対話しながら、その意味を先行理論であるビリーフとの関連付けの中で解釈した。データ分析の中で、それまでの事例のサブテーマに統合可能であり、新しいサブテーマが見出されなくなった時点で、飽和を判断した。

## 2) 老年期うつ病者への治療的ケアプログラムを開発する

老年期うつ病者のレジリエンスを活性化する視点と抑うつや希死念慮につながるビリーフを緩和する視点を統合し、回復のために効果的な治療的ケアのプログラムを検討する。先行研究や理論および今回のナラティブ研究の結果をもとに効果的なケアの要素を抽出し、研究者ならびに精神看護の臨床のエキスパートとの間で内容の妥当性や臨床適応性などについて、合意が得られるまで検討する。

## 4. 研究成果

### 1) 老年期うつ病者の抑うつにつながるビリーフ

研究参加者は、19人の老年期うつ病者であり、男性7名、女性12名、平均年齢73.7±5.6歳であった。全研究参加者は、研究参加者として医師から紹介された時点において、うつ病の急性期から脱し、維持期あるいは回復期の状態像であった。得られたデータを分析した結果、老年期うつ病者の抑うつにつながるビリーフとして、テーマ1「罪悪感と後悔」(サブテーマ「過剰な罪悪感」「未解決の課題への後悔」「積み上げてきた功績の否定」)、(2)「悲観」(サブテーマ「身体や認知面の不安」「死にたくなる」「自己への関連づけ」)、(3)「治療は非効果的」(サブテーマ「自己の生き方への向き合いが必要」「若い人には分からない」)、(4)「愛する人や社会から必要とされる人になりたい」(サブテーマ「家族に尽くしたい」「いい人でいたい」「がんばりすぎる」「働いていたい」)の4つのテーマが導き出された。

老年期うつ病者の抑うつにつながるビリーフは、青年期・成人期のうつ病者のビリーフと違い、人生の統合という老年期の発達課題を反映したものであること、老年期の喪失体験を基盤としていることなどの特徴がみられた。また高齢者にとって、愛する人や社会から必要とされることは、Well beingのために重要なことであり、老年期うつ病者はこのような人や社会とのつながりのなかで回復するが、老いに伴う喪失体験によって従来のような役割を担うことが困難になったりする状況では、葛藤や悲哀が大きくなることが考えられた。支援としては、老年期うつ病者が老いや喪失体験を抱えながらも、社会の中で人間としての尊厳が尊重され、包摂されることによって、自己の生き方の肯定ができるような環境を創造していくことが重要であるといえる。

## 2) 老年期うつ病者への治療的ケアプログラム

先行研究および精神療法やリカバリーの理論、ならびに研究1)の結果から、老年期うつ病者に効果的な治療的ケアについて研究者と精神看護の臨床エキスパートの間で検討した結果、以下のようなケア項目が抽出された。

1. 症状の程度を把握する。
2. 認知症との鑑別や身体疾患の合併の有無のアセスメントを行う。
3. 身体表現性障害や妄想性障害などの他の精神疾患との鑑別やうつ状態のタイプをアセスメントするために、生活史と病歴を把握する。
4. 自殺のリスクアセスメントを行い、自殺念慮がある場合には、希死念慮の緩和と自殺防止のケアを行う。
5. 身体症状を緩和することができるようにケアを行う。
6. うつ状態の程度に応じて抑うつが緩和するように働きかける。
7. ナラティブアプローチやライフレビューなどの援助技法を活用しながら、患者の罪悪感や後悔・悲観的な思いを受けとめ、それらが緩和し、自己の生き方が肯定でき、人生の統合が促進されるように支援する。すなわち、患者の苦悩に寄り添い、喪失を生きる中で新たに創造しようとしている価値や英知に敬意を払い、患者の人生や生き方に学ぶ姿勢で支持的に対話する。
8. 患者自らの症状や生活をマネジメントしながら生きるために必要な力を引き出すことができるよう支援する。

当初の計画では、治療的ケアプログラムの有効性を評価するための実践研究を予定していたが、COVID-19 パンデミックにおける制約によって実施できなかった。そのため、臨床適応性の評価とプログラムの洗練化のためにさらなる研究が必要である。

## <文献>

長谷川晃，宮崎球一，根建金男．(2014)．うつ病研究における国内の動向-反すうに関するメタ

認知的信念, Depression Frontier, 12 巻 1 号, 73 - 79 .  
笠原嘉 . (1976) . 精神科医のノート, みすず書房, 東京 .  
警視庁生活安全局生活安全企画課, 平成 26 年中における自殺の状況,  
[https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H26/H26\\_jisatunoukyou\\_01.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H26/H26_jisatunoukyou_01.pdf), 2023  
年 6 月 1 日閲覧 .  
厚生労働省, 平成 26 年 ( 2014 ) 患者調査の概況,  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/>, 2023 年 6 月 1 日閲覧 .

高橋祥友 . (2009) . 新訂老年期うつ病, 日本評論社, 東京 .  
田中浩二, 長谷川雅美 (2012) . うつ病を抱えながら老いを生きる高齢者の体験, 日本看護科学  
会誌, 32 巻 3 号, 53 - 62 .  
田中浩二, 長谷川雅美 (2014) . 高齢者のうつ病からの回復-生活世界との関連における検討, 日  
本看護科学会誌, 34 巻, 1 - 10 .  
Tanaka K (2020) . Depression linked beliefs in older adults with depression, Journal of  
Clinical Nursing, 29(1-2):228-239.  
宇佐美しおり, 相澤和美, 川田陽子他 (2015) . 老年期うつ病患者・家族への対応, 日本精神保健  
看護学会誌, 24(2), 105 - 124 .  
Wright LM & Bell JM, (2009) . Beliefs and Illness; A Model for Healing, 4th Floor Press,  
Inc; First edition.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Tanaka Koji	4. 巻 29
2. 論文標題 Depression linked beliefs in older adults with depression	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Clinical Nursing	6. 最初と最後の頁 228 ~ 239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jocn.15081	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Koji	4. 巻 39
2. 論文標題 Experience of Elderly People with Charles Bonnet Syndrome Due to Visual Impairment	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 91 ~ 99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.39.91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------